

「更級日記」美濃地名考

——「あつみの山」をめぐる——

田 中 新 一

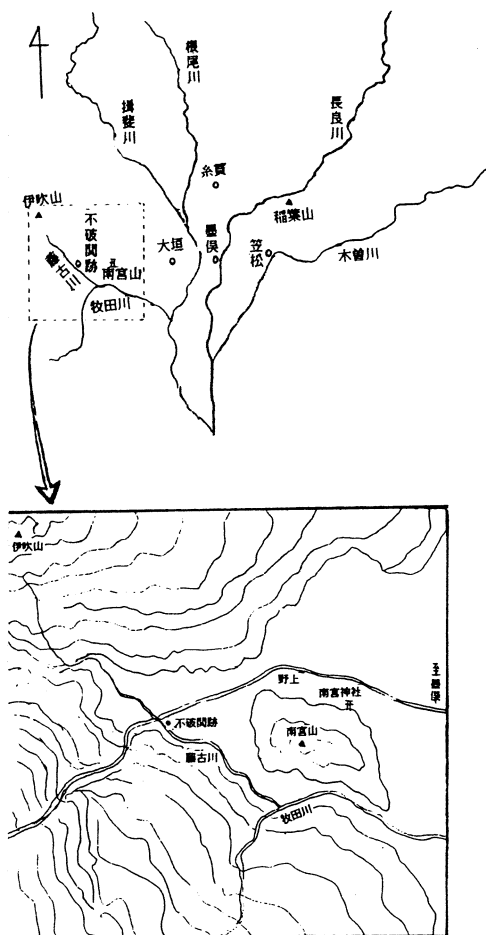
「更級日記」冒頭部の上洛の旅の記事の中には、地理的叙述の上で不審とされている箇所が幾つかあり、その解明に向けた論攷は数多い。そうした不審な箇所が生まれた原因としては、本来作者の側に原因のある場合と、そうでない場合との両面がありそうである。不審な箇所のすべてを作者の記憶錯誤に帰せしめる事は容易だが、そうした安易な態度に対して具体例によつて警告されたのが、松村博司氏の「『更級日記』帰京の旅の地理的錯誤について」^(注1)の論攷であつた。作者の記憶錯誤として作者に罪をかぶせる前に、原文のありように従つて可能な限りの解釈を考えてみることの重要さを、富士川に関する説話の部分と、二村山の位置の二点について教示されたものである。本稿も同趣の考察である。大方の御斧正をお願いしたい。

◇ 問題の所在

菅原孝標女の上洛の旅での、美濃国通過の部分は次の通りである。

美濃の国になる境に、墨俣といふ渡りして、野がみといふ所に着きぬ。そこに遊女どもいで来て、夜ひとよ歌うたふにも、足柄なりし思ひ出でられて、あはれに恋しきことかぎりなし。雪ふりあれまどふに、ものの興もなくて、不破の関、あつみの山など越えて、近江の国おきながといふ人の家に宿りて、四五日あり。(本文は日本古典文学全集による。傍線は筆者)

墨俣―野上―不破関・あつみの山、という経過である。長良川沿いの墨俣は、現在こそ岐阜県の中心部にあり、中濃・西濃両地区の境に位置しているが、中世の天正期以前においては、木曾谷に発して西流を続ける木曾川の川筋が、現在のように笠松町で南下しないでそのまま西流して、墨俣で長良川に合流しており、従って墨俣が美濃・尾張の国境に当たっていたことは広く知られている。右の「更級日記」の文も、この事を明証し、尾張の国から墨俣の渡しで美濃国に入っており、そしてそのまま西に向かい、野上宿を経て、右文の傍線箇所の記事になる。



「不破の関」については問題ない。しかし、「あつみの山」については古来不審とされ続けてきた。美濃国で「あつみ」と言えば、通常「厚見」が浮かぶ。「厚見」とは現岐阜市中心部一帯を指す呼称で、延喜式以降中古・中世・近世を経て、明治初年に至る間の郡名であった。従って、厚見の山ということになれば、現岐阜市中の金華山（稲葉山）及びその続きの山々ということになるが、それでは地理的に不破関と隔たりすぎて結び付かない。野上や不破など西濃地方の地名の連続する中に突然中濃地区の地名が紛れ込んだ態であり、かつまた、日記の路次筋から全く隔絶しているからである。「厚見の山」説ではいかにもこの傍線部分を解き明かしたい。

「あつみの山」について、従来の主な注釈書に当たってみる。

○『更級日記新註』^(注2)

不詳。和名抄に「厚見郡厚見郷」の名が見える。その厚見郡は明治二十九年に稲葉郡と改められた。その郡にあった山かとも思われるが、それならば不破の関よりも、野上よりも、墨俣よりも更に東になる。

○『新註更級日記』^(注3)

岐阜県（美濃）厚見郡を今、稲葉郡といふ。岐阜市（稲葉郡の中にある）の稲葉山を指すのでもあらうか。然らば墨俣より東である。

○『更級日記新解』^(注4)

和名抄七の「厚見郡（今の稲葉郡）厚見郷」によって、ここの稲葉山とすれば、今の岐阜市となり、不破・野上・墨俣より東となり、道順が逆になる。

○日本古典文学全集『更級日記』^(注5)

岐阜市加納のあたりかというが不明。

雪ふりあれまとふにもの、けうもなくてふわのせきあつみの山なとこえてとある。

一つの推測を提出したい。ここは本来

.....ふわのせきかはみの山なとこえて

とあったのではないか。即ち、その書写伝承過程の一階梯で、本来あった「かは（うい）を「あつ」（あつ）」と、字形類似のために書写者が誤読書写したものとみたらどうだろう。

この憶測が許されれば、ここは本来

不破の関川、美濃山など越えて

という文であったことになる。美濃国西域に位置する「川」と「山」とを対比させ、それら山川を「越えて」という文だつたと見るのである。

◇「不破の関川」について

以下、この仮説の可能性について考えてみたい。まずは「不破の関川」である。

作者孝標女は足柄越えのところで、「関所のある山」を「関山」と言っている。

からうじて、越えいでて、関山にとどまりぬ。これよりは駿河なり。よこはしりの関のかたはらに、岩壺といふ所あり。

この流儀で、「関所のある川」の意で、不破の「関川」と言つたものだろうか。

奈良朝三関の一、不破の関については、古来名高い。天武天皇白鳳二年七月の設置にかかると伝えられる。
『不破郡史』^(注1)には、

不破関址と伝ふる所は、不破郡関ヶ原村大字松尾字大木戸坂の上にあり。……………(中略)……………大木戸坂を西下すれば歌題に名高き関の藤川あり。川を渡れば亦上り坂となり、坂上には南北の山を連ねて一種の城砦に等しき防禦工事を施せる址あり。……………などとある。

この関所自体は平安期初頭既に廃止されて荒廃していくが、その廃虚と化した古代関所址は、その後、歌枕として語り継がれて、美濃国の文化遺産になっている。

和歌所歌合、関路秋風といふことを 撰政太政大臣

人すまぬ不破の関屋のいたびさしあれにし後はただ秋のかぜ (新古今集・一六〇一)
は、その代表歌と言えよう。

その古代関所址の西側には、伊吹山南部に源を発し、関ヶ原を経由し、養老郡上石津で牧田川に合流する山川が流れている。「不破の関川」とは、此の川を指す。

この川はまた、古来「関の藤川」の名で和歌の世界に登場することが多い。そして、その歌語の淵源として、通常「古今集」の歌が挙げられる。

例えば、中世初頭の「藤川五百首」の巻頭部には、次のようにある。

関路早春 定家卿

たのみこし関の藤川春きてもふかき霞に下むせびつつ

○新潮日本古典集成『更級日記』^(注6)

所在不明だが、「和名抄」に見える「厚見郡厚見郷」の山とすれば、墨俣・野上・不破よりは東方。

○『更級日記・建礼門院右京大夫集』^(注7)

美濃の国厚見郡厚見郷（岐阜市加納）の山とすれば、不破・野上・墨俣より東方になる。

○新日本古典文学大系『更級日記』^(注8)

所在不明。和名抄第七に美濃国厚見郡厚見郷（現岐阜市加納付近）があるが、その地の山とすれば、墨俣やのみよりも東方で、更級日記の道順が前後する。

○新編日本古典文学全集『更級日記』^(注9)

所在不明。『和名抄』に見える「厚見郡厚見郷」（岐阜市）の山とすれば、墨俣より逆の東方となる。

その他は、日本古典文学大系始め、いずれも「場所不明」とするばかりである。^(注10)

「あつみの山」が不破関近辺にあれば問題はないのだが、そうした山名も、また伝承も管見に入らない。因みに、美濃經由の各種紀行文（東関紀行・十六夜日記・小島の口遊・なぐさめ草・富士紀行・覽富士記・藤河記など）にも「あつみの山」の所見はない。従って、本文のままならば「不明・不審」とせざるを得ない場面である。

◇ 解決法

が、ここでもう一度本文を見直してみたい。底本たる定家筆御物本のこの部分をそのまま翻刻すると、

みのの国せきの藤川絶えずして君につかへむ万代までに、古今

元慶の御べの歌なり、かの歌を本歌とせり。……………

のごとくである。

なのに、孝標女が、「古今集」にまで登場するこの歌枕「関の藤川」の表現を使わないで、「不破の関川」と呼んだのは何故だろう、という疑問が湧いてくる。この問題について検討する必要がある。

◇ 古今集「関の藤川」の検討（１）——真淵の提言——

「古今集」巻二十（一〇八三）の歌は、

美濃の国関の藤川絶えずして君につかへむよろづよまでに

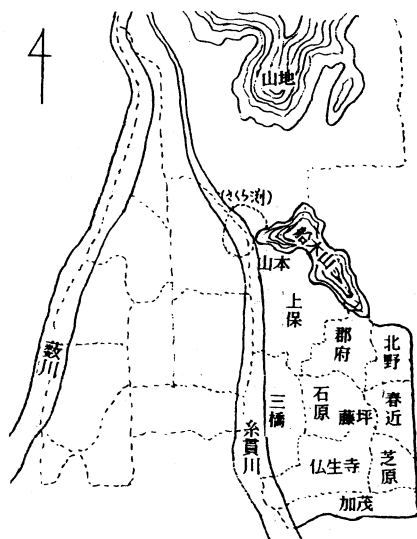
これは元慶の御べの美濃の歌

とある。しかし、この歌を不破関の西の川を詠んだ歌とする点については検討の余地を残しているように思われる。

左注「元慶の御べ」とは、陽成天皇即位の大嘗会を指す。その時の悠紀国・美濃国の歌だという。だが、この歌で詠まれた「関の藤川」が確かに不破郡不破関の西を流れる川（現称、藤古川）を指しているとする確証はない。賀茂真淵が『古今和歌集打聴』で指摘しているように、「三代実録」によると、陽成天皇の元慶元年（八七七）十一月大嘗祭悠紀は美濃国席田郡、主基は備中国都宇郡とあるので、むしろ、この古今歌に詠まれた「関の藤川」は不破郡の川でなく、席田郡にそう呼ばれる川があったと考える方が妥当かも知れない。平安朝期に都の貴族の邸宅や法会の席上歌われた催馬楽「むしろだのいつぬき川にすむ鶴の……………」の流行に窺われる、都での「むしろだ」の知名度からも、

その可能性は考えられる。「むしろだ」は「席田（むしろだ）郡」の意、「いつぬき川」は席田郡の中央を流れていた根尾川本流で、糸貫川とも呼ばれる。枕草子にも「河は、飛鳥川、淵瀬もさだめなく、いかならんとあはれなり。大井川。おとなし川。……いつぬき川、沢田川などは、催馬楽などの思はするなるべし。」などとあって、席田の地名は催馬楽とともに都に広まっていた。「能因歌枕」にも「糸貫川」の名は見える。（なお、糸貫川は、後世、室町期の享禄三年（一五三〇）の洪水で本流が西部を流れる藪川に移り、廃川敷きに変貌した）

そこで、席田郡の「関の藤川」という可能性について考えてみよう。『岐阜県史』『糸貫町史』を始め、郷土資料によつて見るに、不破郡より東部に位置する席田郡は、霊亀元年（七一五）に本巢郡の一部を割いて設置された小郡な



旧席田郡

から、尾張国入席田君及び新羅渡来の土木技術者集団によつて拓かれた極めて特異な経済力のある郡で、ために悠紀の重責を担い得たものと言われている。「和名抄」によると美和・磯部・那珂・名太の四郷より成つていた。その詳細な比定は困難だが、現糸貫町の仏生寺・郡府・北野・春近・石原・上保・三橋と、現北方町所属の芝原・加茂の糸貫川東部の大字地区がこれに当たるとする。そしてその中には、注目すべき事跡を伝える所が幾つか有る。

一、まずは「関」だが、不破関だけが「関」ではない。美濃国武儀郡には、関市という都市がある。その名の由来が古代武儀駅に関係した関所があったからとも考えられ

ている事例に照らしても、「関の藤川」というのは、近くに、この特異な席田郡の郡政に関わって特殊な関所でもあったのだろうか。狭小な郡内の情況（前頁略図参照）を一瞥すると、

○南部の仏生寺・加茂近辺には、美濃国を東西に走る大動脈、東山道が通り、古代交通の要衝に当たっていた。しかも、その背後には、以下の要地を抱えていたのだから、官の関所があってもおかしくない。

○その北隣は、石原。仁和三年（八八七）不破郡内にあった美濃国分寺焼失後の代用を果たす勅許を得たという由緒ある定額尼寺跡と推定される八幡神社神域もこの地にある。「殿宇宏麗」（『三代実録』・仁和三年六月条）として、官寺に準じ、国家鎮護祈願に当たった。

○その北隣は、郡府。当時繁栄の席田郡の中心官衙の地と目されている。近隣には市場の設置も想定されよう。

○その北隣は、上保。歌枕として知られる船木山及びその丘陵（当地権力者の墳墓）はここにある。数少ない美濃歌枕である。その山本に流れ着いた根尾谷よりの大水は糸貫川として南流して、催馬楽に謡うように鶴の住む大川を成して、都にも知られていた。

一、次いでは、「藤川」についてだが、現在、そうした名の川はない。郡内に「藤坪」という小字地域があり、郡府・藤坪・仏生寺と南流する席田用水があり、あるいは、その川筋を指す可能性があるかも知れないが、所伝はない。しかし、私は、その名称については、むしろ、地形・地質の研究成果を重視している。『糸貫町史』^{〔注12〕}によると、根尾の谷から流れ出た本流は船木山古墳の丘陵の西端の岸に集中し、深い淵を穿って、その先は、幾筋にも扇状に放射南流して集中が解除されていたという。この船木山麓の深い「淵」^{〔注13〕}（さくら淵）に注目したい。すなわち、「ふちかは（藤川）」ではなく、「ふちかは（淵川）」なのではないか。瀬川に対し、底の深い川の意の「淵川」が本態ではなかったか。『町史』によると、室町期の享禄洪水以後、川筋を西の藪川に移して、廃川化した糸貫川は、このさくら淵

付近で伏流し、南部扇状流域は砂礫層のため、渇水期に水無川になっていたという。しかし、その昔は、北部、船木山山本に見る深く広い「淵川」や、そこから本流として南下した糸貫川こそは絶えることのない川として有り続けたものであろう。

こうして、「関の淵川」と考えてこそ、「絶えずして」という下句にも続く。「そのように絶えることなく、君に仕えん」という表現も完成することになろう。その点、「藤川」では「絶えず」に意味上も連続しないし、こうした地形の実状も伝えない。

さらに付度すれば、「せき」も「関」でなくて「堰」かも知れない。根尾川が船木山麓で「堰き」止められて「淵」となつて流れる「川」という意かも知れない。

以上のように理解する時、元慶の大嘗会の悠紀を務めた美濃国席田郡の言祝ぎ歌として、「古今集」巻二十の大嘗会歌は落ち着くことになろう。

ただ、この「関（堰）の淵川」と糸貫川との名称関係については確定できない。同一河川なので、糸貫川の別称と考えて良いようにも思うが、深い淵を作り、絶えることなく流れた根尾本流の呼称と考えておきたい。

こうして、「古今集」に収められた「関の淵川」は、当時、催馬楽に謡われた「席田の、いつぬき川（糸貫川）」として、根尾谷に発して席田郡内を流れる川であつて、不破郡とは無関係だったのではないか。

◇ 同検討（2）——古今歌の孤立——

平安朝の古今集所収の悠紀歌「せきのふち川」がいわゆる「関の藤川」として不破の関川を指しているかについて

は、今一つ反証が挙がる。この古今集悠紀歌の唯一例を除くと、平安朝期に「関の藤川」の事例を文献に見ることは和歌・散文を通してむづかしい。この一例以外、平安朝に用例皆無という不思議さが残る。「関の藤川」の詞が勅撰集に現れるのは、遙かに下つて鎌倉期の第十一次勅撰集「続古今集」^(注14)である。また、勅撰集に限らず、諸歌集や「能因歌枕」「奥義抄」など平安歌書・歌論書の類にも全く見えない。上洛の旅中、著名な歌枕は想起している更級日記作者が「関の藤川」を挙げずにいるのも、この存疑の一証と言えるかも知れない。

どうやら「関の藤川」が不破関の川を指す歌枕として登場・固定してくるのは、用例から見て、中世期のこのように思われる。その経緯を示すものが、前掲「藤川五百首」の前書きである。

此外題を藤川と名づけ侍る事は、定家卿老後にかの難題をよめる巻頭に、関路早春といへる題に関の藤川とよめる故なり。関路などは、逢坂、清見、須磨、竜田など昔よりあまねく人のよめる所をこそよみ給ふべきに、美濃国不破の関にながる川をよめるは、其身藤家なれども官位もいやしく侍る事を下に含みて下むせぶとあり。藤家の事は大職冠より代々の摂政関白などの家なり。其氏には生れ給へども、わづか中納言の位なる事をふかく述懐して、ふかき霞に下むせぶとはよめる、むせぶとはどこほる義なり、されば、官位のすすめ事あそばされたる歌なり。(以下略)

この歌書は、藤原定家が難題といわれた四文字題で詠んだ「藤川百首」を基に、それに倣い同題で詠んだ為家・為定・阿仏尼・実隆の百首を加えたものだが、不破の関の川を指して「関の藤川」と詠み据えた始源を言い当てている。定家の所為であるだけに、後世に与えた影響の大きさを思わせずにはおかない。以下の中世歌書になると、不破の関の川として、この歌語は盛行を見、枚挙にいとまがない。また、歌書に留まらない。

☆「沙石集」巻五

或人ノ語シハ、不破ノ関ノ西ノ谷河ヲ打渡リテ、小家ノアリケルニ、「此河ノ名ハ、何ト云ゾ」ト問シカバ、年々ケタル下妻ノ「マダシラセ給ハヌカ。コレコソ、

君ガ代ハツキジトゾ思美濃ナルヤ 関ノ藤河ヨロツ世マデニ

ト、万葉集ノ歌ニ候ナル、此河ノ事ナリ」ト申シカバ、小野ノ小町ニアヘル心地シテ、アハレニ侍ギ。（日本古典文学大系、238頁）

☆「十六夜日記」

十八日、美濃のくに、関の藤川わたるほどに、まづおもひつゞける。

わが子ども君につかへんためならでわたらましやは関の藤川

不破の関屋の板びさしは、今もかはらざりけり。（日本古典全書、266頁）

☆「太平記」卷一九

其勢一万余騎、二月四日都ヲ立、同六日ノ早旦ニ、近江ト美濃トノ堺ナル黒地河ニ著ニケリ。奥勢モ垂井・赤坂ニ著ヌト聞ヘケレバ、コ、ニテ相マツベシトテ、前ニハ関ノ藤川ヲ隔、後ニハ黒地川ヲアテ、其際ニ陣ヲゾ取タリケル。（日本古典文学大系二、294頁）

など中世作品にはいくらかも登場する。

こうした状況を勘案すると、中世期になって、古今集に載る「せきのふち川」を「関の藤川」不破の関川のことと理解するようになったのは、平安中期には早々と席田郡が衰退してしまつた経緯と無縁ではなからう。席田郡情報が、その衰退とともに都に届かなくなつてしまい、席田郡の「関の淵川」は忘れ去られて、「関」と言えば、古代三関の一として著名な不破の関の荒廃の姿が都で流行するにつられるように「関の藤川」を不破の関の川として理解するよう

になったのではなかったか。

今ではただ、平安初期の古今集時代に栄え、その悠紀歌に名を残すのみとなった席田郡の旧跡として「関（又ハ堰）の淵川」を偲ぶばかり、ということのように思われる。

* * *

こうして、不破郡の「関の藤川」が登場するのは中世期になってからのことと思われ、少なくとも更級日記作者の頃には、まだ、その歌枕としての意識―右の「古今」の悠紀歌が不破郡・席田郡のいずれを指すものにせよ―は確立していなかったのではないか。

平安朝期、「ふじ川」を詠んだ歌を探すと、曾根好忠の歌として、

ゆく水のえにだにあらばふじ川のながれて人にすまざらめやは（好忠集・四五九）

渡らむと思ひきざしてふじ川の今にすまぬは何の心ぞ（同・四七四）

などが見えるが、それらは『曾根好忠集全釈』^{（注15）}の解釈の通り、仮名づかいからしても富士川説が正しく、「藤川」の用例ではなからう。

上述のように、中世以前に「関の藤川」が歌枕的地位に立ったと見る確証がないところからいっても、また、よしんば歌枕として確立していたにせよ、それが席田郡の川であって不破郡のそれではない可能性が指摘できるという点とであってみれば、更級作者が不破地方通過に当たって、不破の関のあたりを流れる川を「関の藤川」と呼ばないで、単に「不破の関川」と呼んだとしても何の不思議もないことであろう。

◇「美濃山」について

次いで、この「不破の関川」と併記されたと見られる「美濃山」の可能性についてはどうか。こちらは、

みの山に茂り重なる玉柏豊のみあかりに遭ふが樂しき（古今六帖・くろぬし・一二六六）

美濃山にしじに生ひたる玉柏豊のあかりに会ふが愉しきや会ふが愉しきや（催馬樂・美濃山、仁明帝時の風俗歌）
などと、古くから歌語として登場しており、

おもひいづやみののをやまのひとつまつちぎりしことはまたもわすれず（伊勢集・三八一）

や、「枕草子」（能因本・前田家本）の「山は」の段に挙げられる「みののを山（美濃小山・美濃御山）」ともあつて各種の文献に現れ、いずれも不破郡宮代村南宮神社の南にある南宮山とその続きの山をいう古称である。この事に関する近稿には、八木意知男氏の「歌枕『美濃小山』をめぐることも」^{（注16）}があり、詳しい。不破郡はこの南宮山の北麓に東西に広がる地帯であり、垂井・野上・関ヶ原と辿る以外に道のないこの伊吹・養老両山系には含まれた山峡の行程は、そのまま南宮山の北麓を抜ける道であり、標高差は九〇〇米に及び、「美濃山を越える」という日記作者の表現に相応しい。

なお、厳密に言えば、「不破の関川」と「美濃山」は行程順としては逆にした方がより適切といふべきだが、この場合は同じ不破郡の地名として併記されているのだから、不破郡経過を「関川・美濃山を越え」と一体として捉えて言い表したものと理解してよいだろう。

◇「美濃山」の歌語認識

「美濃山」という歌語認識が孝標女にあったということなら、触れておきたいことがある。

古今集伝本群の中に、大嘗会歌五首（一〇八二―一〇八六）の後に、上記の「美濃山に」の歌を入れているものが伝わっている（志香須賀本・基俊本・雅俗山莊本）。その第五首目の歌（二〇八六）は今上（醍醐）大嘗会歌であるが、その時の主基は丹波、悠紀は近江であるから、その次の美濃山の歌を醍醐天皇の大嘗会歌とすることは出来ない。従って、美濃山の歌は、その位置づけに合理性を持たない。

この異本歌については、田中喜美春氏による詳細な検討が既に提出されている。氏によれば、それは差し替え・切り継ぎの所産と見る。すなわち、一〇八三（清和天皇大嘗会歌）の左注に二様の本文があつた跡を諸伝本上に確認し、その解析法として、当初撰者が清和天皇大嘗会歌を誤認して「美濃山に」を収録して奏覧本を作り、その後、正しい大嘗会歌である「美作や」と差し替える時、誤って「美濃山に」の、歌だけ切り出してその左注を残したために、二様の左注本文が生じた、そして切り出された「美濃山に」の歌は末尾に書き留められたという過程を推論された。この考え方に従えば、当初、撰定の一過程において、

美濃山の歌

関のふち川の歌

がともに美濃の歌として並んで撰入されていた。ところが、前後の大嘗会歌が各国一首であるところから、清和天皇大嘗会歌と誤認して撰入していた「美濃山に」の歌を切り出し、「美作や」の歌をその左注とともに入れたが、その折、

切り出し歌の左注を残してしまうというトラブルが起こり、異文が生じたと見るのである。

もし孝標女の記述に「関のふち川、美濃山など越えて」とでもあれば、この「美濃山」の歌も含めた両美濃歌の入った古今集異本を彼女が見たとも考えられようが、私の仮説の日記本文では、「不破の関川、美濃山など越えて」ということであつては、そうした古今集異本からの受容を読みとめることは出来ない。作者の「美濃山」の記述は、文献からの受容というのなら、古今集からの受容でなく、催馬楽などからの受容と考える事になろう。

◇ 結び

旧来の「厚見の山」を考えて、「不審、不明」という解説にとどめざるを得ない窮状から、一つの展望でも持ち得たという意図で、試論を開陳してみたまでである。

因みに、後世の書写者による誤読書写と見る見方は、この上洛記の部分にも少なからずある。例えば、犬養廉氏は、「しもつけ」は「しもつき」の誤写、「中にゐて」は「中に有て」の誤写、「四五日かねて」は「四五りかねて」の誤写

等指摘され、また、津本信博氏も、

「川はしら（かはゞしら）」は「門はしら」の誤写、「けふりあふ」は「けふりすふ」の誤写、「中にゐて」は「なかにいて（出で）」の誤写

等を指摘される。^(注19)

本稿も、そうした誤読・誤写の一例として考えようとする試みである。

文中、歌の引用はすべて「新編国歌大観」による。ただし、適宜漢字に改めた。

(平成九年九月二〇日稿)

注

- 1 『名古屋平安文学研究会会報』第一号・昭53・4
 - 2 玉井幸助・育英書院・大15。〈再版『更級日記評解』有精堂・昭27〉
 - 3 吉池浩・河原書店・昭24
 - 4 曾沢大吉・白楊社・昭29
 - 5 犬養廉・小学館・昭46
 - 6 秋山虔・新潮社・昭55
 - 7 三角洋一・ほるぷ出版・昭61
 - 8 吉岡曠・岩波書店・平1・卷末地名解説
 - 9 犬養廉・小学館・平6
 - 10 西下経一・岩波書店・昭32
 - 11 不破郡教育会刊・執筆者藤井治左衛門・大15・昭2
 - 12 通史編・第一節第二項、昭57
 - 13 さくら淵と呼ばれた深淵も、現在は整地され、公園脇の小川となり、地形的痕跡を残すのみである。
 - 14 『統古今集』一八九〇、
 - 15 文永二年九月十三夜歌合に河月を
 - 16 神作光一・島田良二、笠間書院・昭50
- 前関白左大臣
- よろづよにつかへてぞ見む月もなほかげをとどむるせきのふちかは
- 『平安文学研究』第五八輯・昭52

19 18 17

「歌の配列」△『国文学』平成七年八月号
影印本『更級日記』頭注、新典社・昭43
『更級日記の研究』・早稲田大学出版部・昭57